

# 安政5年、三河国羽田村の御犬拝借

橘 敏 夫

安政5年(1858)のコレラ流行は、世界的な感染爆発の余波が日本を襲ったもので、文政5年(1822)を第1次とすれば、第2次にあたる。第1次流行は西国中心であったが、第2次は東海道筋では駿河国原(沼津市)・吉原宿(富士市)における感染が深刻であり、巨大都市江戸では猖獗を極めた。コレラ流行にともなう一連の出来事を「コレラ騒動」と呼ぶが、その際に駿河国大宮町(富士宮市)と御宿村(裾野市)、伊豆国下田(下田市)は武蔵国三峯山(埼玉県秩父市)の御犬を拝借し、駿河国下香貫村(沼津市)と深良村(裾野市)は京都の神楽岡吉田社を勧請し、いずれも病難除とした。また、重寺村(沼津市)では、京都紫野の今宮大明神を勧請した。ここでは三河国羽田村(豊橋市)のコレラ騒動について紹介する。安政5年7月頃から東は江戸・駿河・甲斐・遠江、西は長崎でコレラが蔓延して死者が続発したことから、吉田藩では藩主が城内3社と金柑丸稲荷・深川稲荷・秋葉社や御霊社における一七夜の祈禱を命じ、村々では氏神へ同様とした。これをうけ羽田村では、羽田八幡宮において8月18日から一昼夜の祈禱を執行した。さらに今回は、武蔵国三峯山にて病難・火難・盗難除の御祓と御犬拝借札を勧請するという行動に出た。使者は久右衛門で、8月20日～9月5日の行程で往復し、同月7日から八幡宮で二夜三日の祈禱を執行した。御犬拝借札は、忤が体調不良になった小助の依頼だった。9月朔日には、3種の御祓のための小祠建立を吉田藩に出願し、許可された。御犬拝借札である「眷属拝借之牘」には、「(安政5年)午八月廿七日一万四千廿四番」と記録されていた。三峯山には、日本武尊が東国遠征に際し、伊弉諾・伊弉冉を祭神として勧請したとする縁起があり、その際に道案内を狼(山犬)がつとめたことから、これを眷属とした。

一方、コレラに対し、これを狐の仕業、しかもアメリカ軍艦が感染源だったことから、アメリカ狐の仕業と考えたり、病状がすすむと体表面にこぶができることに對し、これを狐が体内に侵入した結果だと考えて「くだ(管)狐」と呼んだ。その狐の天敵が狼(山犬)だと観念され、三峯山とコレラの病難除が結びついた。同様の形でコレラ騒動において注目されたのが、遠江国春埜山(浜松市)だった。ここでは、嘴のある天狗で翼もあり、山狗に乗っている太白坊大権現を祀っていた。御犬を招待するための駿河・遠江からの代参が急増した。以上、事例紹介が中心であるが、課題をひとつだけ指摘したい。それは、病難除の対象を決定する要因は何か、ということである。吉田領内における羽田村以外の行動は不明であるが、吉田藩の地方・山方役人27人は、津嶋天王社に病難除祈禱のために代参人を派遣した。これは従来通りの行動である。御犬拝借を依頼した羽田村小助が、三峯山について知識を得ていたことは確実であろう。江戸奉公の経験があり、三峯講の存在を知っていた。あるいは、吉田宿に近いということから街道筋で行き交う噂が基になった、などが挙げられる。ちなみに、神楽岡吉田社を勧請した村々は、もともと神職支配を目指す吉田家との関係が深かった。様々な視点での検討が必要である。

[付記]

本報告を基にして「安政5年のコレラ流行にともなう三河国渥美郡羽田村の行動」(『愛知大学総合郷土研究所紀要』第67輯、2022年)を発表した。ご高覧いただければ幸いです。